

もしウマ娘がヤン
じやったら？

ジャックマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

たった1度の人生を楽しみたいが為にミスを犯した男はとんでもない事になっていく…

ウマ娘、特に1部があまりにもヤンデレが似合いすぎるので書いてみた作品です
基本的に更新は遅いです

目次

スタート	1
エイシンフラッシュ	5
ゴールドシップ	14
タマモクロス	19
駿川たづな	26
シンボリドルフ	31
シリウスシンボリ	35
トウカイテイオー	41

スタート

ウマ娘

それは神秘的な存在

走ることを喜びとし生き、人々を熱狂の渦に巻き込む非常に魅力的な存在だ。

そんな彼女達を支えるのはトレナーナーと呼ばれる存在で、難関な試験を突破し訓練を積み初めて得られる名誉有る事……らしい。

トレセン学園、正式名称は忘れたけど日本で一番有名なウマ娘の育成施設だ。

此処では日夜ウマ娘達が頑張つて鍛えてる。

その1室でスタートするのがこの物語。

「考え直してはくれないか？」

「あー……まあ、無理寄りの無理ですね」

「しかし!？」

「理事長、俺は夢を支えて夢を叶えさせて来ました

そろそろ俺も夢を叶えたいんすよ」

適当に伸ばした髪を適当に縛り、だらしなく白衣を着たのが俺こと『中井讓二』

それに対するは茶髪の子ビツ子こと理事長の秋川なんとか、その横に居るのは秘書のたづなちゃんだ。

緑の服は目に優しいのに性格はわりと厳しい女の子だ。

「質問！君の夢……聞かせてくれないか？」

「俺の夢つてのは……あゝ……だらだらニート生活つて奴ですよ

気ままに生きるアレ、したかつたんすよね」

「驚愕!?!」

「し、正気ですかトレーナーさん！」

「正気も正気、超正気

これが正気じゃなかったら何が正気なのってレベルで正気だぞ」

ウマ娘のトレーナーになったのだって面倒な労働をしたくないからだ。

給料はかなり高いし、担当したウマ娘がレースで勝てば賞金の何割か俺の懐に入ってくる。

それかG1級となると1レースうん100万単位。

お陰で俺は生涯ニートで居ても暮らせる程に貯められたし、カードとか作るための社会的な信用も得られた。

まあ、担当したウマ娘達は曲者揃いだけど全部このニート生活の為の布石だ。

若い内は苦勞は買つてでもせよなんて言つてゐるけどまさにそれ、お陰で1日9時間労働で週休1日なんて拷問を食らつてたよ。

「んじや辞表出しましたし必要書類も出したんで帰りますね」

「停止！待ちたまえ！」

「なんすか？」

「君の担当ウマ娘はどうするつもりだ？」

「あ、そこら辺の処理も昨日までに済ませたんで平気つすよ

流石G1ウマ娘だけ有つて皆喜んで引き受けてくれたつす」

俺は「んじや今まであざつした」なんて言つて理事長室から立ち去つていく。

ドアが閉まると理事長『秋川やよい』は頭を抱え顔を青くして怯え出した。
それを見て光無い目でやよいを見つめるたづな。

「理事長？」

「せ、静止！」

これは彼の手の回しが早くて後手に回ってしまった結果だ！

ちやんとひき止める手が有るから落ち着いてくれ！」

それを聞き安堵の表情を浮かべるたづな。

ニート生活をしたが為にウマ娘達に惚れられ、更にはそれが病的にまで発展してし

まった世界。

それがこの地獄だ。

エイシンフラツシユ

有能な秘書や優秀な側近が居るってのはかなり得だ。

海外の物語で言えばアーサー王のマーリンやシャルルマーニュの勇士、日本で言えば徳川家康の本多忠勝や伊達政宗の片倉小十郎。

何が言いたいかつてと、優秀な王様だけじゃなせることは少ないって事だ。

そこに気付いた俺は最初にスカウトしたのは有能な秘書系ウマ娘だ。

心当たりは有ったので土下座せん勢いで口説き、何とか何とか今日までやってこれた。

エイシンフラツシユ

ドイツだったかイギリスだかアメリカから来た超絶ド真面目ウマ娘だ。

ちなみによくドが着くとかド級ってのはドレッドノート級のドラしいよ。

「おはようございます」

5分の寝坊ですよトレーナー」

「おはようさん」

朝目が覚める度、コイツの正面顔が目の前に。

フラッシュは時間に正確だし食事の栄養バランスとかを兎に角考えている真面目な性格だ。

朝弱い俺は目覚ましがてらついでに起こして貰ったり朝飯を作って貰ってる。

あ、別に不法侵入とか学園の規則とかは平気だぞ。

そもそも俺の家は自腹で購入した一軒家だし、規則は寮に入るなよ系だから。

合鍵を渡してるから侵入楽々、まあお陰で此処つてフラッシュの家だっけ的な錯覚を起こしちゃうけどね。

しかしその錯覚とは今日でさよならバイバイ、俺はこの家に引きこもる！（ゴリチュー）

顔を洗ってリビングに行けば一汁三菜の整った朝食が。

席に着いて手を合わせて「いただきます」をしてから味噌汁を一口。

朝の味噌汁はジャステイス、具が豆腐と油揚げつても最高にハイつて奴にしてくれ

る。
ちなみに2番目に好きなのはネギと油揚げだ、これテストに出すから覚えておけよ。

「あ、俺トレーナー辞めるから」

「そうですか……………はい？」

「ミィ、トレーナー、辞める、ユィ、これから、フリーダム、ネクスト、トレーナー、決まった」

「わざとらしい片言で理解出来ません、もう一度！確りと！報告！」

流石におふざけが過ぎたのでそれっぽい理由を付けて説明を試みる。

何が良いかな？両親は健在だし（60代なのにいまだにデートしまくりな関係）……
そうだ友人の言ってたあれを使うか。

「いや実はな親に孫の顔をいい加減見せろって言われてて、流石にこの仕事をしながらだとほらアレがアレじゃん

だからいつそ前からの夢だったデザイナー（名前だけでニート）をやりながらの……ね？」

そう言うフラッシュはスマホを取り出して何処かに電話をかけた。

うーん、何か嫌な予感がバリバリだな。

「息子さんは両親から早く孫を見せろと言われたと申しておりますが本当ですかお義父さん？」

『いや、孫は満太郎と空太郎が居るからそんなこと言わないよ』

「……………本当の理由は？」

アイエエエ、オヤジ、ナンデオヤジ!?

いつの間に関り合ってたんですかねフラッシュユさん!? 流石に俺の親はトップシークレットだからウマ娘の誰も知らないはずなのに!

「早く言ってくださいトレーナー」

手に持っていたタンブラーがフラッシュユの握力によってドンドンと前衛的なオブジェに変わっていく姿は、俺が返答をミスるところなる的な姿と重なる。

さてどうするか、悪戯IQこそ高いが普通のIQは平均成人男性しか無いぞ。

「あー……燃え尽き症候群って言うのかね、若かりし日のソウルが……な」

「？」

「フラッシュユはクラシック、シニア、更にはURRも優勝

ルドルフは7冠達成、他にも他にも……な

ぶつちやけやる事が無くてな

そんな訳で新しい目標が見つかるまでお休みしようかな……なんて」

そう言うとかかを考え出すフラッシュユ。

おや、まさか納得してくれた系? スゲエ爽やか、初日の出を新しいパンツで迎えた位スゲエ爽やかだ。

「解りました……」

「まあ、ちゃんと後任は信頼出来る奴だししかも実力もある超スゲ——」

「つまり再燃出来れば辞めないのですね、では行きましよう準備は出来てます」

「ホワイ？」

玄関から旅行カバンを2つの持って来た。

何ぞやそれ？

「フラツシユさん？」

「丁度良かったです」

「？」

「本日より3日間休みなのは知っています」

休日を利用して1度故郷に戻り挨拶をして貰おうかと思ってきましたし」

んー、話がさっぱりわからんですしお寿司。

「男と女が1つ屋根の下、それでトレーナーは再度燃えれば辞めない」

なら方法は1つです結婚しましょう」

「生命体の思考をしてほしいかなあ〜何でそこから結婚に飛躍したの？」

君は会話のキャッチボールはしないで会話で銃撃戦でもしてるのかい？

てか担当してきたウマ娘って皆言葉で戦争しまくってるじゃん、何故どうしてトレセ

ン珍獣百科でトップページに乗ってるゴルシだけマトモに会話できて君達は出来ないの？

チームプレアデスはゲリラ地帯なの？ 駆け込み寺扱いされてるけど実は隔離施設なの？」

チームプレアデスってのは俺の担当してるウマ娘達のチームで何故か駆け込み寺扱いされてるんだ。

正規メンバー（プレアデス所属）はフラッシュ含めて5名。

後はスランプに陥ったり訳ありなウマ娘が複数ちよくちよく顔を出す程度だな。

さて、この理解不可能な状況はどう対処すれば良いんだ？

「互いの両親に顔を会わせるのは当たり前的事でしょう

それを断るならウララさんに注意して貰いますよ」

「止めておけフラッシュ、その術は俺にきく」

ハルウララ

走ることが大好きな超純粋ウマ娘で、コイツが居るだけで普段の3割増で商店街が盛り上がるとか何とか。

まあ、結果が伴わないからと理事長に半ば強引に担当させられたんだ。

夢は有《font:ul40》馬《font》記念の優勝なのだが……そもそもウ

ララの脚質はダート向けの短距離型。

前提から間違えているのだが、あんな純粋な目でお願いされたら俺だって断れん。ちなみにマックとかオペラが東京大賞典で優勝したいなんて言ったら「NO！」って言うけどな！

まあ、そんなこんなでウララファンが応援に来て奇跡を見て貰ったって話。

うん……まあ、短距離ダートつてのはトレーナー間でも有名でウララが出た時に他のトレーナーが「ドベは無くなった」なんて言ってたんだけど勝っちゃった♪

ライスもブルボンもあのゴルシでさえ泣きながら喜んでたなあ……お陰で人生3回分頭を使ったけどな！

そんな訳で俺にとつてウララは妹とか娘的な存在なんだよ。

それに注意なんてされたら心が折れる、物理的には骨が折れるけどな！

「納得しましたね、では挨拶に向かいましょう」

今から出発すれば予約1時間前には空港に到着するのでゆっくり出来ますよ」

「ふっ……譲二戦法No. 1」

隙は逃がすな！」

「っ!？」

「ペプシメーン！」

視線が搭乗チケットに行った瞬間、豪快に窓を破り全力疾走（1000m18秒の鈍足）で裏道から裏道へと渡り逃げていく。

フハハハハハ！まだまだ尻が青いな小娘め！

『今回は』逃げられましたか、ですがいつまで持ちますでしょうか？

早く諦めて楽になった方が身の為ですよトレーナー♪

飛散した窓ガラス片を1つ1つ丁寧に取り除き、テープとシートを使って簡易補修しているエイシンフラッシュ。

その作業が終わるとキッチンから砥石と包丁を複数持ってくる。と丁寧に研いでいく。

1度研げばあの人の為

2度研げば幸せの為

3度研げば子の為

4度研げば……愛の為

「でも厄介なゴルシさんに知られる前に手は打っておきましょうか」

チームプレアデスの唯一の良心にして抑止力と呼ばれるゴールドシップの存在は計画に邪魔なのでどうやって引き離すか。

プレアデス正規メンバー5人は勝利する為にテレビ電話で作戦を練るのだった。

ゴールドシップ

今は人を隠すならしく理論で商店街に来てるけど、流石に着てる物がパジャマだからか道行く社畜共がジロジロと見てくる。

現在は7時8分、やってるのはコンビニか1部の店だけだ。

手持ちは財布のみ……流石に家にはフラッシュが居るだろうし常に監視してそうだから戻れないよな。

てなると……マン喫で過ごすか。

鬼滅とかソーマとか読みたかったし丁度良い、先ずは腹ごしらえだな。

余程じゃないとマン喫の飯って高い普通が多いから、こうやって予め膨らますのが良いんだよな。

つて、完全に金の無い奴の考えになってるし。

今の手持ちは目玉が飛び出るほど貯めたカードが有るんだからそこら辺気にしないで良いじゃん。

ダメだね俺、頭パンパカパーンになってるよ。

「肉野菜炒めね」

「はいよ、2000円ね」

なの……なの……なのに匂いに釣られて近くの肉屋に行ってしまう。

メニューがやたらと豊富な小さな店先で注文してしまった。

肉！食わずにはいられない！

5分くらいしたら割り箸と紙皿に乗った肉野菜炒めを手渡され、適当なベンチに腰を据えて食べてみる。

うん普通、特徴が無いのが特徴ってレベルで普通だ。

まあそんなことよりフラッシュユがアレって事は俺の担当した何人かはあんな感じになるって覚悟しておいた方が良いな。

安全か危険かで1度仕分けてみるか。

先ずウララはセーフだろう、なんせ妹だし可愛いし。

ゴルシは微妙だな、マックとオペラ辺りはアウトの可能性が高いから保留。

担当5人、ブルボン、フラッシュユ、ルドルフ、スズカ、クリークは完全アウトって前提だな。

ビコーとマルゼンとマヤはさっぱり解らん、アイツ等はパンパカパーン過ぎる。

ターボとイクノとネイチャは………ギリセーフか？

ううむ、こう見るとアウト率高いな。

「ん？よおトレナー、朝っぱらから肉なんて飛ばしてるな

今日はレース場でアゴゴライブか？」

「いや、俺トレナー辞めたから」

「なんだそのジョーク？ゴルゴル星でも流行らねえぞ」

アゴゴライブ懐かしいな。

ゴルシの木魚とチケゾーのエアギターと俺のアゴゴとオペラの謎のミュージカルでレース場を満員にしたのを思い出すな。

「でえ、ゴルシちゃんに本当の事言わねえとゴルスペシャルの刑だぞ」

「いや昨日付けで辞めた、理由はくまあ疲れたからだな」

「せーいー！」

ゴルシからのドロップキックを肺にくらい2〜3メートルくらいぶっ飛ぶ俺。

ゴルシの事だからってつきり「んじや今度差し入れ持って遊びに行くわ」なんて言っつて頻繁に遊びに来る程度で済むって思ってたのに。

「ふざけた事言ってるじゃねーよ！一緒にG64星雲救うって約束したじゃねえか！

何勝手に辞めてんだよ！お前の熱いパッションはその程度なのかよ！」

ダツシユで近付きヘッドドロックを綺麗に決めてくるゴルシ。

「ステイステイステイ！決まってる、首が決まってるから！」

「決めてんだよ！」

何その「当ててるのよ」的な言い方？

ゴルシの８８ロケットが後頭部に当たってるけどガチで痛いから楽しむ余裕なんて無い……

「それにお前が辞めてみる、学園内で戦争じゃ……」

「トレーナー人、ましてやイケメンでもイケボでもない平々凡々な奴だぞ

戦争どころか泣く奴が居れば御の字だろ」

「とにかく！」

「このゴルシ様はお前が辞めるの許さねえぞ！」

「おいおいおいおい、実権を握ってるのは理事長だから流石に無理じゃね？」

「ばか野郎！」

その理事長すら敵なんだからな！

鬼塚英吉と両津勘吉とキリコ・キュービーじゃなきやこの戦争は生き残れないぞ！」

何それ怖い。

ふざけるのは程々にしてとにかく話して貰うか。

「それによ、アタシの話しに着いてこれるのはお前くらいだろ……」

「ホワイ？」

「辞めるなよ……もつと遊ぼうぜ……」

んー、この首筋に当たると液体の感覚、まさかゴルシが？

いやいや無い無い、あのゴルシが目から滝壺するとかあり得ないだろ。

花京院の魂を賭けてやるよ。

「あー、たまに遊びに来いよ……な？」

「辞める気は変わらねえか」

あるえ、なんか凄く嫌な予感がしてきたのですが。

ゴルシは俺を持ち上げると近くの麻袋に放り込み口を縛って全力で走り出した。

ガツクンガツクンと揺れる袋内、時折当たる何かと最悪な物が連続し気を失ってし

まった。

タマモクロス

どうも、前回最後に誘拐された残念主人公こと中井讓二です。

今はゴルシに誘拐されて何処かに走っているのですが場所が不明、いやあ困った困った。

なんて一人でふざけてると突然ゴルシの進撃が止まり、外から激しいぶつかり合いの音が。

この癖のある音と、たまに聞こえる杉田某みたいな声は間違い無い奴だ。

俺は適当に激しく動き袋の口を緩め外へのっそりと出ると近くには不格好なこけしみたいな物が。

「助かったぞジャスタウエイ」

ゴルシの親友とも言えるウマ娘に助けられ、俺は何処かの路地裏で一人黄昏る。

何処だよ此処。

「ん？お、中井ちゃんかこないところまで何しとるん？」

「お、お前は？」

それは紛れもなく奴さ

スパースタマモ

「うちは赤く無いし腕も普通や!!!」

「そう言うなよタマモキヤツト」

「猫ちやうわ!」

「えー、じゃあタマモナイン?」

「クロスや! タマモクロス!」

「沈黙の胸部さんより実は巨乳ってか、身長とかから見るとわりと平均的なスタイルしてるタマモクロスじゃないか

どうしたの?」

タマモクロス

驚異的な末脚と小柄ながらにパワフルな走り、こんな感じのノリの良い性格から幅広い層に人気のウマ娘。

令和こそそ話

実はタマモとゴルシの出るレースは入場券がかなり手に入りにくい。

「で、どうしてタマは此処に?」

「オグリとかが登校するなりケータイみた瞬間鬼みたいな顔になって出てな、心配やから着いてったんやけど…」

「あー……そりや……まあ御愁傷様？」

タマは基本的に差しでオグリは差しと先行の間、町中で動くとなるとわりと不利なんだよな。

それで振り切られたって理解したけど流石に口には出さない。

「しつかし、何があつたん？」

「俺が辞めるって知つたからじゃね？」

あ、しまった。

ゴルシでさえああなるんだしタマが知つたらもつと不味い事になるじゃん。

己の口の軽さに「ゆるぎさん」になつてるがタマはそこまで気にしてる様子が無い。

マジか!?

「そりやおつかれさん

中井ちゃんの人気やと家に担当が乱入してくるとか有つたんとちやう？」

「ヴェツ!?!フラツシュが今朝方来ましたですたい」

「やろうなく中井ちゃん人気やし

てなると住家が無い状況やろ」

「金は有るし適当にホテルを転々として〜」

「洗濯はどないするん？」

「コインランドリーだつてバカにならんやろ？面倒やし家来る？」

タマの家つて寮じゃん!?しかも同室はあのオグリキャップ、詰むわ!

断りを入れようとする就先に笑つて否定してくるタマ。

「ちやうちやう、寮やなくてウチの実家な

彼処なら洗濯機に寝床に三食有るし程よくトレセンから離れとるから隠れられるやろ」

「タマ……」

フラツシユは担当だったからああなった、ゴルシは気があつてよく一緒に遊んだからああなった。

そう考えるとタマは奴等ほど深い関係では無いから平気かも知れないな。

そう思い頷くとタマは「おかんに言つてくる」なんて言つてこの場から離れていった。

いやあ、持つべきものは優しいタマモクロスつて古事記にも書いてあった。

うん、タマは優しいよく解るね。

「おかん、実はそつちに一人匿つてほしいんよ」

「は？彼氏ちやうわ!いや……まあ……将来的には……旦那やけど」

「頼むなおかん、讓二はめつちや逃げるからとにかく閉じ込めておいてな

どうするって、うまびよいして好きだっちして光ともすすればええんやろ
おかんの子やで、そこら辺は解つとる」

おいしいおいしい!!!

電話が不穩!

うまびよいとかヤバイ単語が聞こえてきたんですけど!!!

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイよヤバイよ!

俺の中の出○さんが出るくらいヤバイよ!

そつと逃げようとするとう電話を終えたタマに背中を見られてしまった。

気温が3℃は下がった気配、流石にヤバイかも。

「おかんな、中井ちゃんが来るんならええつて言ううとつた」

「そうかくありがたいんだけど少し用事が有るから待つて——!?!」

突然の腰に来る衝撃。

俺の身体能力雑魚とか言うなよ、人間が車並の速さで走るとかこう見えて砲弾並の重
さがウマ娘なんだからな。

俺は普通だ! コイツ等がおかしいんだからな!

「はよ行かんと思つかるから行こうか」

「タマ? タマちゃん? タマさくん?」

「安心し、すぐにウチも向かうからな」

めっちゃハイライトが無い目で見てくるタマ。

うっそだろ、俺とタマの接点でアオハル杯くらいじゃん！何でこうなるの!?

そんな時に来る救いの手、金髪に色白な陰と黒髪小麦肌の天使だ。

その名は……

「リトルコンコンとシュガーハート！」

「リトルココンです！」

「ビターグラッセだ！」

「そうそうそれぞれ

どうして此処に？」

「不穏な気配を感じてみたら貴方が居ただけです」

「すげえ、スゲエ強そうだ

勝負しろ！」

素人目でも解る程に俺に好意なんて抱いてない2人は榎本代理理事もとい榎本トレーナーの担当である。

マジか、あのアナ○が弱そうなんてネタにされてるトレーナーの愛バにまさか助けられるなんてな。

俺は軽く礼をしてその場からさるのだった。

こうなった原因はなんなんだ、ゆるさんぞ！じわじわとくすぐってやる！

駿川たづな

はいはい、皆のものにエレキネットの俺つちだぜ

なんか2年くらいぶりな気がするけど気の所為木の精。

ヤベータマから逃げて取り敢えず電車に乗って見知らぬ土地へと付いた俺。

此処どこ? いや、適当に乗ったから此処本当に何処なの?

まあ、見慣れない町並みだけど逃げられたしこれ幸いと駅から出て取り敢えず周辺をブラブラしてる。

「腹が……減ったな……」

前に食った肉野菜炒め程度しかはらに入れてないからヤベーくらいに腹が減った。

くっそ、腹の虫なんて……腹の虫なんて……いつも騒いでるじゃん!?

アレ? トレ専ってブラック?

まあ考えても仕方ないしもう辞めたしお寿司、近くの某マクドナルドに入って適当に注文。

しかしなんで朝はバーガーが無いんだよ! ハワイヤン好きなのにつて悪態ついてる

と呼ばれたので受け取っておく。

そういやフラツシユの朝飯を食ってたわなと思いつつマフィンを一齧り。

かつてー!!!アメリカ人いつもこれ食うのかよ!!!

「美味しそうですねトレーナーさん♪」

「味はいいけどかつてーからなあ……?」

「ふふ……♪」

……緑の悪魔が居る気がするなあ

何ていうか、プリコネとかデレマスでも緑の悪魔って呼ばれている種族のさ……

おのれサイゲ!!!

「捕まえました♡」

「たづなさんや……何であつしの腕に己のアームをそんなアナコンダみたく絡ませて

？」

「約束、果たして欲しくて♡」

「は?」

「覚えてませんか?」

うーん……知らぬ!

しかしだ、此処で返答をミスると死になりかねないと俺の本能が叫んでる。

「ねえじよー君」

「え？ちよつ?!えつ?!みっちゃん?!?!?」

「嬉しい……やっぱり覚えてた♡」?!?!?

はいいいいいいいい?!?!?

みっちゃんつてのは俺の幼馴染の名前でウマ娘なんですけどお!!?

なんて思つてると帽子を少しずらしてウマ耳を見せてくる。

あ……確かウマ娘つて名前2つ有るんだよね……なんて基礎的な事を思い出して乾

いた笑いを浮かべてる俺。

上手く説明出来ないけど、例えばタマモクロスやオグリキャップには普通の日本人名

が有つてレース時にのみ名乗るのがその名前なんだ。

何ていうか……リングネーム?みたいなのがそれなんだ。

でだ、駿川さんはかつてお互いに「とれーなーになつたらわたしをみてね♪」的な事

を言った幼馴染でして……

「じよー君が大きくなるの待つてたんですから♡」

「オーケー、落ち着こうかみっちゃんや

此処はハンバーガーショップで互いに大人だ、大事なものはモラルではないかね?」

「ふふ……朝からお城の様な建物ですか?」

じよー君のえつち♡」
っしや!

視線がズレた瞬間、俺は俊足をもって人混みに紛れて全力疾走。
常識を持つウマ娘なら自分が本気で走るとこの人達を壊してしまう事を知ってるの
で動けない。

フハハハハ！これこそこの天才の策よ!!!

たづなは「あらあらく」なんて余裕な表情で彼の食べ残したマフィンを見ていた。そして匂いを嗅ぎ、愉快そうな笑みを浮かべた。

「逃げる事が出来ないのにじよー君は可愛いですね♡」
ウマ娘からは逃げられない！

シンボリルドルフ

オツス、オラ讓二。

ひやくひやくまさか辞めるなんて言ったら担当ウマ娘から一時面倒見てたウマ娘。

それに幼馴染ウマ娘から激重感情向けられるとかオラゾクゾクするぞ。

次回ウマゴンボール乙『讓二の代わりはお前たちだ！』絶対見てくれよな！

はいどうも、ネタに走るくせにそのネタの偏りが酷い事をタイシンに突っ込まれて自分がおっさん？と内心ヒヤヒヤしてる讓二君やで。

そこ関西弁使うとタマモクロスが来るとか言うな！

あのうまびよい未遂事件は割りと怖かったんだからね！それとゴルシの88（ダブルエイト）ロケツト事件、もう妹系ウマ娘しか信じられないね！

妹、妹はすべてを解決する。

とまあ、みっちゃんから逃げた俺はまたもや電車に乗り見知らぬ土地へとさよならバイバイ、俺はコイツ（財布）と旅に出るしましたとさ。

良く考えてみる、そりや離れても都内に居たら捕まるのは確定してるじゃん。

でしょでしょ？ならさ県外に逃げたらどうなると思う？レース場は既に閉じてて場外応援場しか無くて、更には地元！

そう！埼玉県は浦和市（現在ではさいたま市浦和区です）に帰ってきたぞ!!!

『南浦和と南浦和のお出口は右側です』

電車のアナウンスを聞き、俺は降りて駅のホームから早足に立ち去る。

そしてタクシーを捕まえてとある住所を伝えると運転手はナビに入力して走り出してくれた。

動くこと10と数分後、俺の目の前にはそこそこのマンション。

ここが実家なのだ。

何ていうか……可もなく不可もなしな家だが、スーパーや国道は近いから使い勝手は良いよ。

中に入りエレベーターで移動し、久方ぶりの帰郷を楽しむために家に入ると……

「お帰りトレーナー君♪」

「……ちよつとりようしーん、緑の眼鏡不審ウマ娘が来てますが何でヤンスか？」

実家のドアを開けたらそこには何時もの私服と眼鏡のルドルフ（エプロン装備）が笑顔で迎えてくれた。

その後ろで額が後退守備を始めてる親父と、ウマ耳を着けたかつての競走バの母が微

笑ましそうに見ていた。

「ハツハツハツ、今をときめくシンボリドルドルがお前の愛バだったなら一声掛けてくれれば良かったのにな」

「そうよそうよ、全くアンタって子は昔っから隠し事ばかりでちつとも現状報告しないじゃない」

お母さんはそれが心配よ」

「イヤイヤイヤイヤ?!?!ワツツ?何故?何?ナデシコ!?

理解が追いつかないデース!?!」

俺の叫びに答えてくれたのは両親ではなくドルドルだった。

その左指には指輪つぼい何かが着いているがこの際無視だ!気にしたら負けだ、古事記にも書いてあった。

「義母様に料理を教わったり『あなた』の事を聞いたり、現役時代のお話を聞いていたんだ」

「……脳が震える……」

「もくフラツシユちゃんにドルドルちゃんに手を出してるなんてくアンタやるわね」

「そんな……彼は何時も私達を一番に考えてくれたのでいつの間にか……でもこうやって婚約だけでもしてくれただけは嬉しいです」

そう言つて左手を挙げて歓びを示すルドルフのだが……俺は終身名誉独身だ!!
そんな事するか!

「お父さんに似たのね〜本当、昔のお父さんにそっくりだわ」

「義母様もですか?」

「ええ、彼の担当だったの〜レースネームは『サニーブライアン』なんて名乗つてたわ〜
ルドルフの視線がズレた瞬間、俺は速攻で家を出て全力疾走で階段を駆け下りた。
クソっ!まさか親にまで手を出すとか人の心ないんか!!!」

シリウスシンボリ

ヤバイウマ娘から逃げるRTAはくじまゝるよゝ

前回はシンボリルドルフが実家を攻めてて逃げることに成功したところで終わりましたねゝ

てな訳で何時ものふざけた挨拶ノルマクリア!

さて現状を報告しようか。

ヤンキー(ウマ娘)に

囲まれてます

そしてそのヤンキーの群れの長

栗毛！流星！誰じゃ!?

「よう譲二、随分面白い事したじゃねえか」

「シリ〜ウス」

「は？相変わらず人間ゴールドシップだなお前は

ま、それがいいトコだけだよ」

シリウスシンボリ

名前で分かる通りルドルフの親族なんだが、何ていうのか……ルドルフが真つ当な道を歩んだ絶対エリートだとしたらシリウスは道を外したアウトロー。

ただ面倒見が良くて顔もいいからと矢鱈と慕われて、特にこの手のヤンキーからは姉御として好かれてるんだ。

まあ、そんな陽キャパリピエリートヤンキーに何故憑かれてるかと言えば……ルドルフのトレーナーだからじゃなくてたまたま見かけたヤンキーAにアドバイスしちゃって、問題児を指導？面白え男で気になられそこからルドルフのトレーナーってバレて偶にヤンキーで囲んではトレーニング見てたって感じ。

「兄さん！トレセン辞めるって本当ツスカ！」

「兄さんの指導でウチ等強くなれたんすよ！」

「あ、ああ……辞めるってか辞めただけど」

ヤンキーAとヤンキーB、この娘は丁度ウララの模擬戦相手に丁度いいからと少し丁寧に見すぎたからか、俺を兄さん何て言って慕ってくれてる。

止めとけヤンキー、そのキラキラ目の術は俺に効く。

「で、何で辞めるんだ？」

理由……聞かせろよ」

「ヴェッ!？」

シリウスはズンズンと近付き、離れていく俺を即壁際に追い込んで壁ドンって奴をし
てきた。

顔が良くて更には声がオラオラしてる受刑者と同じで惚れてるんじゃないかだと？
その様な事有ろうはずが御座いません！

「ヒ、ヒゴトニツサレテヤツタイデオボツデ……」

「……仕事に疲れて休みたいだ？」

ハツ……随分と人間らしい理由だな、人間ゴルシのお前らしくない平凡な嘘だな」

何でオンドウル語解るんだよ!？」

あれですか、貴族はオンドウル語とグロンギ語は必須だからって習うんですかねえ!？」

シリウスは右腕を壁ドンしたまま左手で胸ぐらを掴んできやがった。

いや〜ん、讓二君はタコ並みにストレスに弱すぎるのでその顔と目で睨まれるととにかくヤバイですよ。

「で、本当の理由は？」

納得出来りや会長さんとか撒く手伝いしてやっても良いぜ」

「ヴェツ!!?マジナンデイスガ?」

「ああ、で?」

「いや〜〜実は元々ニート志望しててウマ娘と勝ちまくってそろそろドロップアウトボーイになりたいから辞めました!」

元氣よくそう答えると何か考えてるシリウス。

まあ、こんなイケメンイケボ貴族ウマ娘なんてこんな木っ端に目を付ける訳無いし真実を言えば良いのよ(↑フラグ)

(つまりだ、コイツの気配からして嘘では無いだろうし本当にニートになるためにトレンを辞めたと

だがここに来て一時担当や担当が邪魔をしてきたり誘拐事件を起こそうとしてる
だいたいそんな感じだろ

って事はだ、私がコイツ側に着いてれば取り敢えずの監視と牽制は出来る

それにコイツは今孤立無援って状況、最高じゃねえか)

「解った、取り敢えずはそれで納得してやる」

「マジか!？」

「お前のやりたいことを自分で選んだんだろ？」

「おう！」

そう言うときシリウスはゾツとする笑みを浮かべ、胸ぐらを離してくれた。

おお我が胸ぐらよ、お帰り。

「どうせ担当達が暴れてるんだろう」

なら私が側近の護衛に、こいつ等は近付けない為の工作に

どうだ？」

「俺は助かるけど……退学にやなりやせんかい？」

「そこら辺は見極めてるっすよ兄さん！」

「アツシ等、兄さんの為に頑張ります！」

そう言うときヤンキー達は頭を下げて雄叫びを挙げ、各々が駆け出した。

でまあシリウスは俺の腕を掴むと「逃げるぞ」と言っただけで確実に逃げ切れる場所へと案内してくれるのだった。

いやあ、まさにヤンキーは助けるもの、古事記にも書かれてる！

トウカイテイオー

じょうじょうじょう、中井讓二！

シリシリシリ、シリウスシンボリ！

スーパー逃避行アクション『トレーナー逃走劇場』この後すぐ！

てな訳で今回は木曜洋画劇○予告風に挨拶してみたネタの偏りが酷すぎてライスに「？」とされた俺の逃避行はくじまぐるよ

今はシリウスと一緒に近くの喫茶店（スタヴァ）に入ってコーヒーを飲み、これからの打ち合わせをする。

「で、讓二は先ず何をする？」

「じ、讓二呼びって……」

「人目が有る以上下手にトレーナー呼びしてネットにでも上げられてみる

奴等が来ちまうだろ」

「そっか、だからシリウスも……」

「その呼び方は止めろ」

そう、シリウスはかなり手の込んだ変装をしている。

髪はカラーワックスで少し青みを掛けて後ろで縛り、付け黒子を口元に。

そして服装も高貴な感じゼロの普通のちよいギャル系で、明らかにシリウスシンボル
 〓コイツ、の図式にならない格好になっている。

オーケー、理解出来た。

昔に一度聞いたシリウスの本名で呼ばなきやいけないよな。

「オーケー夏羽（なつは）」

「ッ!?!」

レースネームの由来が大きな鳥を意味する事と、夏の到来を意味する事でシリウスな
 んだつてさ。

頭良いよなあ〜ちなみに何で俺の名前が譲二なのって聞いたたら「〇ジョージがテレビ
 に映ってる時に産まれたから」だつてさ。

チツクシヨー!!!ちゃんちやかちゃんちやんちやんちやんちやんちやんちやん。

（う、上手く行けばこのまま済し崩し的に結婚できるから名前呼びに最もらしい理由を
 付けたが……こ、これはヤバイな

本名なんて親ですら偶にしか呼ばないのにコイツは……）

「先ず行くとしたらトレセンやレース場が無いところになるよな

出来れば長くニートしたいし物価はあまり高くないほうが良いよなあ

つまり、夏の島沖縄だな！」

「な、夏っ!!」

「ど、どうした？もしかして夏嫌い？」

そんなどつかのサマーなんて着くプリティーでキュアキュアな声してるのに夏苦手なのか!？」

「あ、いや、悪く無えと思う……」

「なら良かった、でも問題は空港までの移動と」

「その為の準備だな」

「服は現地調達で何とかなるが家とかはな〜」

「安いホテルで過ごすか、それとも野宿かっところか？」

「そうなんだよな〜」

そんな感じで打ち合わせしていると窓から視線……いや死線が感じたので思わず見ってしまうと笑顔でハイライト先生が休業中のトウカイテイオーが俺達を見てそつと携帯を取り出してウマインを送ってきた。

『表 出ろ』

ヤンキーかよ?!怖いよ!!!ってかテイオーさんは誰にウマインしてるの!？」

嫌な予感しかないんですけど!?

「どうする?」

「と、取り敢えず夏羽と一緒に出るしか無いでしょ」

「だな」

そう言い、お会計を済ませて表に出ると殺意の波動に目覚めそうなテイオーが俺達を見てくる。

頼むからサガットを虐めないでくださいね。

「ねえトレーナー……」

「何度も言ってるけど俺はお前のトレーナーじゃないからな」

「ねえトレーナー……」

「いやだから」

「ねえトレーナー……」

「質問を質問で返すなど習わなかったのか」

「ねえトレーナー……」

「壊れかけのラジオ?それとも壊れたアンプ?」

「ねえトレーナー……」

「あー譲二ちん分かっちゃった、これ選択肢でハイを選ばない限り進まない系のイベン

まあ、ウララの模擬戦相手の為に軽く鍛えたけど有マ記念でぶつかって大差で負けて泣いたりしてたねえ。

つまりだ、ウララ♀妹。

ウララ♀可愛い、可愛い♀正義。

ウララ♀正義、QED証明完了だな。

「ところでテイオーさんや……離さないと俺の腕がパーンってなっちゃうんですが……」

「そっか……トレーナーの足を折れば逃げられないよね……トレーナーの腕を折ればボクがご飯食べさせてあげなきゃね……トレーナーの目を潰せばボクが居なきゃ何もできないうね……」

「ん？テイオーさんや？」

「あはっ♪ボク気付いちやった、こうすればよかったんだヨね♪」

流石に不味いと思ったからかシリウスが全力で引き離し、テイオーの相手を引き受けてくれた。

うん、流石にこれは俺でもヤバいって気付くよ。

ふざける余裕ないもん！

「っ！例の空港で待ち合わせだ！」

「? あっ! おう!」

「邪魔するな!!!」

「邪魔するさ!」

「その声!?!」

「やつと気付いたか」

シリウスに背中を預け、俺は全力で逃げ回る。

そして辿り着くんだ俺のパラダイス沖縄に!

そう、何故なら沖縄にはウマ娘人(うまんちゅ)が少ないからだ!